

ゴブレットは泉屋博物館の青銅器がヒントに。上部は真塗、下部は黒檀の木のまま塗装なし。撓め皿も真塗。

アジアにしかない天然素材、漆について
西村圭功さんに伺いました。

使うことで艶が増す

はんつや

「半艶」の美。

「新品のときは光り過ぎず、
“使い艶でより輝いていきます”



この朱盛椀も、半艶・新塗（藁のキャプション参照）。鮮やかな色と、穏やかな輝き、そして何とも言えない大胆で削ぎ落された造形の美しさに心惹かれる。

TABLEWARE & TOOLS

天然素材である漆とガラス。日本発ならではの美しさが凝縮

漆はすごい！ その理由

1. 素材がすごい！ **天然素材**
自然に還る素材であり、口にはいても安全。
2. 強度がすごい！ **酸に強い**
レモン、酢の物……傷まないのが漆の強さ
3. 機能がすごい！ **抗菌作用**
花が傷みにくいので、花器にも適しています。



2019年金沢世界工芸コンペティション出品作品。



2019年カホギャラリー一周年展出品作品。

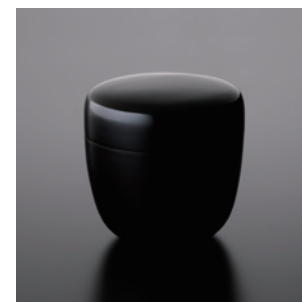
上・木地見せ撓めボウル。撓めの薄挽きの木地がよりリアルに感じられる塗装なし木地のまま、内側だけで塗り固め、撓めた作品。内側は金箔仕上げ。下・砂張塗撓め茶椀。砂張（さはり）※のイメージで黒漆ではなく、漆の下地材で制作。

※茶道具で、大陸からの輸入ものを唐物といい、その唐物のに、銅や錫の合金といわれるこの「砂張」がある。

洗練された、撓めの器の造形美に目を奪われて、西村圭功さんをご自宅に訪ねたとき、写真の藁を見せたい。ただいたときの一言です。一見、普通に綺麗な藁、しかし感じられなかったのはまだまだJAXURY経験値が不足のため。じっと見ると、ぼつと穏やかな輝きを感じられて美しい。その後、多くの漆器に出会い、ぴかぴか光る器が数多いなか、「やはり、あの藁は美しかった……」と、何度も思い起こすことに。

「半艶（はんつや）」が、うちの特徴で、売り、なのです。普通は、何でも新品がいちばんきれいです。でも漆は違います。使いこむことで「使い艶」が増してより美しくなるのです」と西村さん。代々の漆職人である圭功さんの大胆で洗練された作品の一端が左のもの。すべて、多くの古典的な意匠の素養と高い技術があるからこそできるもの。東京でデザインの仕事をしていた洋子夫人と共に炭研ぎ漆 t e n n 他、挑戦は続きます。

「この藁に、私の技術のすべてが凝縮されています」



これが「技術の結集」の藁。65 mmほどの小さな器は、漆の最高技術「真塗（しんぬり）」を何度も繰り返し、ごみを取り除き、刷毛目を残さないようにする高度な技術が必要とする。



「上塗り」。漆を何度も和紙で濾し何度も刷毛を通してムラなく塗る



ホコリを1つずつ拾う。湿度を与えなければ乾かない漆だからこその技。



砥石で研ぐ。一つの藁に、約20個の違う砥石が必要に。